

平成23年度 第1回 京都市伝統産業活性化推進審議会

日 時：平成23年12月8日（木）午前10時～正午

場 所：京都ロイヤルホテル&スパ 麗峰の間

出席者：（14名）

柿野 欽吾	会長（学校法人京都産業大学理事長，京都産業大学経済学部教授）
若林 靖永	副会長（京都大学大学院経営管理研究部教授）
井澤 一清	委員（市民公募委員）
大畑 眞知子	委員（京都市小学校長会副会長，京都市立藤城小学校校長）
河村 和子	委員（京の伝統産業春秋会監事）
佐治 壽一	委員（京の伝統産業春秋会会長）
島田 昭彦	委員（株式会社クリップ代表取締役社長）
日野 明子	委員（スタジオ木瓜代表）
山舗 恵子	委員（株式会社京都リビング新聞社統括編集長）
湯浅 靖代	委員（市民公募委員）
若林 卯兵衛	委員（京都府仏具協同組合理事長）
渡邊 隆夫	委員（西陣織工業組合理事長，京都商工会議所副会頭）
細見 吉郎	委員（京都市副市長）
白須 正	委員（京都市産業観光局長）

欠席者：（3名）

高木 壽一	副会長（元京都市副市長）
大谷 貴美子	委員（京都府立大学生命環境科学研究科教授）
滝口 洋子	委員（京都市立芸術大学美術学部准教授）

1 開会

2 細見副市長挨拶

3 議事

- | | |
|--------|-----------------------------|
| 報告事項 1 | 京都市伝統産業活性化推進計画に係る進捗状況等について |
| 議題 1 | 第2期京都市伝統産業活性化推進計画（仮称）素案について |

4 意見交換

<委員>

- ・ 第1期計画の結果そして現状については、数字で見れば、出荷額の減少を食い止めることが出来なかったという意味で、非常に厳しい状況が続いているというシビアな見方が必要である。他方で、第1期計画の間に、業界関係者の皆様の様々な努力や挑戦、京都市の支援施策の充実などで新たな展開が生まれ、新たなマーケットづくりにつながるような取組みが生まれていることも評価したい。
- ・ 出荷額に関する目標については、素案では「減少率の縮小」となっているが、実現可能とかいう保証があることではなく、実現したいという目標を掲げているという意味で、「減少を食い止める」という表現にするのも一つの案ではないかと思う。
- ・ 第1期計画には、伝統産業を大事にする生活というのは、スローライフという私たちの新

しい、これから望ましいライフスタイルにつながるものではないかという市民へのメッセージを最後に記載している。第2期計画でも、3月11日の東日本大震災を受けて、私たちの生活をどう見直していくかということが問われているということを踏まえ、計画の最終版においては、何らかの市民へのメッセージを付記したい。

<委員>

- ・ 最近の旅館は部屋も設備もちゃんとしており、従業員も着物を着ているが、ビニール畳であったり、料理の器がプラスチックであったりする場合が多い。これでは「和のライフスタイル」とは言えず、また業界の活性化にもつながっていない。
- ・ 今後の人口減少、マーケット縮小は確実であり、そういう意味で出荷額の目標を「減少率の縮小」とするのは現実的だとは思いますが、目標は何か希望が持てるようなものが良いとも思う。もう少し理念的なものにした方が業界は希望を持てるのではないか。
- ・ 伝統産業愛好者のすそ野を広げるということで、着物業界では「浴衣も振袖も変わらない。」という哲学を持って、浴衣を流行らせることを頑張っている事業者もあるが、現実には中国製の浴衣がどんどん入ってきており、伝統産業の振興に役立っているのか疑問である。単純にすそ野を広げるというのは、無意味になってきたのではないかと思う。

<委員>

- ・ 子供たちに本物の伝統に触れてもらうことは難しい面があるが、やはり公教育の中で、産業の側面に加えて、文化としての側面もきちんと教えていく使命がある。ただ、下手に取り扱おうと、いわゆる括弧つきの「伝統」や「和」になってしまうので、気を付けなければならない。
- ・ PTA関係の組織にも関わっているが、PTAの中での口コミの情報というのは、大きな力を持っている。PTA活動において、本物の文化や、京都の伝統に触れる機会を設けることも伝統産業の活性化に有効だと思う。

<委員>

- ・ 東京の目線では、京都の業界は「みやびやかな京都」の見せ方が下手で、もったいないと思うことが多い。多くの雑誌は春、秋、必ず京都特集を行い売れているが、それは、編集の仕方が良いからであり、伝統産業製品の実際の購買にもつながっている。
- ・ 京都に幾らでも店はあるのに買いたい店が見つからない、並べ方や見せ方が客に上手にアピールされていない、買いたい意欲を起させないというところがあり、自己満足になってしまっている、もしくは、客観的な視点が持たなくて、今までずっとこの見せ方でやっているからということで、そのままになっている。そういう根本から見直すべきではないか。

<委員>

- ・ イベントのチラシでも、高い感性のものを採用しようと思うと、ある程度費用を払わなければならないが、行政では随意契約できる額が大体10万円以下である。今、10万円以下で知恵やセンスを買おうというのは、大変難しい。この壁をどこかで破らないといけない。

<委員>

- ・ 京都以外の人から、「京都は良いな」と言われることが多いが、何が良いかというと、京都の人は「本物」に囲まれて暮らしていると思われているからである。京都以外の方は「本物」を求めて、京都に来ている。

- ・ 素案では、「日本文化への関心が高い海外の消費者」とか、「新たなライフスタイルへの関心が高い女性」などターゲット層を絞っているが、関心を持つ新たな層を育てていくということも必要である。

<委員>

- ・ 海外からデザイナーを招いて西陣を見てもらったが、彼らは帯に興味を持つのではなく、作り方、匠の技の方に興味を持ち、ショップの壁紙に西陣織を使ってみたいと言っており、帯その物ではなく、違う使われ方が十分に可能ではないかと感じた。作り手目線での自己満足ではなく、逆に、使ってもらいたいなら、使いたい人をまず京都に招いて、素材をどの様にアレンジできるか考えてもらうような方法が良いのではないか。
- ・ 伝統と新しい部分の盛り込み方については、感覚論だが伝統の部分2割、あと8割の部分は新しい部分を盛り込んで表現して、ちょうどではないか。また、伝統産業は作ることに注力しがちだが、作る力1に対して、伝える努力、伝える意識にその5倍くらいかけることが重要ではないか。

<委員>

- ・ 伝統産業の一部、特に小規模な業種については、「もう産業ではない」という定義付けが必要である。産業として成長させるといふよりも、保存する、守るという視点が重要である。
- ・ 「伝統産業の日」も年々続けてきたおかげで、内容も充実し、毎年期待しているファンも増えた。行政の悪い面として、事業が単発で終わることがあるが、「伝統産業の日」を含めて良い事業は根気よく継続をしてもらいたい。
- ・ 伝統産業は業界の形態が千差万別で、各業界が持っている前向きな気持ちの温度差も大きい。やる気のある人だけにグループをつくってもらい支援した方が良い。
- ・ 京都府や商工会議所との重複事業や、既存の計画との関係を調整してほしい。例えば、後継者育成においては既に伝統工芸大学校というものがある。きっちりと整理してもらわないと、業界としては「またか」思ってしまう。

<委員>

- ・ 基本理念の目標の中で、「若手職人の育成支援の充実と雇用機会の創出」というような雇用の問題があるが、緊急雇用対策の交付金は来年度からなくなると思う。市独自で何か対策をするのか。
- ・ 東山区は小学校の統廃合が進み、学校跡地の活用が問題となっている。清水小学校や六原小学校などの跡地は、非常に観光地にも近く、そういった学校跡地を伝統産業に触れ合える場として活用ができないか。

<事務局>

- ・ 国からの交付金に比べると非常に少ないが、雇用対策に係る予算については市独自でも確保しており、小中学校に職人さんを派遣する事業や、西陣織会館やふれあい館などで実演していただく事業などに活用する予定である。
- ・ 伝統産業を紹介する施設を学校跡地を活用して作ることも考えられるが、既にそのような施設として「ふれあい館」を運営しているので、それ以外に多額の経費をかけて別の施設を作ることは、慎重に検討していく必要がある。

5 閉会

<柿野会長>

- ・ 今日いただいた意見は、副会長，そして事務局とも相談して，できるだけ素案に生かせるよう検討していきたい。また，今月下旬からパブリックコメントの募集を実施し，その意見を受けた最終的な案を来年の2月開催予定の第2回審議会で改めて議論していただき，今年度中に第2期計画を策定する予定である。